

「校歌等に歌われた上田城と真田幸村」(NO4)

関口貞雄(48期、関西同窓会)

以下の文は、関西同窓会会報 No44 に掲載したものです。

追記 「長野県歌“信濃の国”に登場しない真田幸村」

長野県出身者なら誰もが知っていて、県人会、同窓会等で合唱される“信濃の国”には真田幸村は登場しない。何か奇異に感じ、この歌の作られた背景と動機を調べると、意外なことが判ってきた。

- 1 信濃の国は十州に 境連ぬる国にして
 聳ゆる山はいや高く 流るる川はいや遠し
 松本 伊那 佐久 善光寺 四つの平は肥沃の地
 海こそなけれ物さわに 万ず足らわぬ事ぞなき
- 5 旭将軍義仲も 仁科の五郎信盛も
 春台太宰先生も 象山佐久間先生も
 皆此国の人にして 文武の誉たぐいなく
 山と聳えて世に仰ぎ 川と流れて名は尽ず



木曾義仲の墓

(最後の地、滋賀県義仲寺(ぎちゅうじ))



佐久間象山



佐久間象山像

(川中島古戦場跡に建つ)

5 番の歌詞に登場する 4 人の郷土の偉人を検証すると、今日の感覚では旭将軍義仲と佐久間象山は肯定出来るが、仁科五郎信盛(武田家家臣、高遠城主)、太宰春台(江戸中期の地理、経済学者)は多くの信州人には馴染みが薄く、あまり知られていない。これにはこの歌の作られた明治 32 年(1899)の長野県政が大きく影響していた。明治 4 年

(1871)の廃藩置県令により、信州は各藩が衣替えした14県が出現した。小藩、天領、旗本領と入り混じった新しい県は地域共同体の形をなしていなかったため、同年11月、第一次府県統合令で善光寺門前町の長野県と松本城のある松本を中核とした筑摩県の2県に統一された。更に明治9年(1876)8月、両者を統一して長野県となった。しかし、県庁が善光寺のある長野に決まると、交通が不便で南信、中信から長野への出張に時間がかかり、翌年から早くも分県論が起った。それが明治22年(1889)から24年(1891)には大規模な分県運動に発展していた。

明治19年(1886)4月、文部省により任命され長野師範学校校長として赴任した浅岡一は、分裂状態であった長野県が一つの県としての機能を果たすために、信濃教育会を立ち上げた。明治31年(1898)、この信濃教育会が小学唱歌を作る目的で、長野師範学校教授の浅井列に作詞を依頼して誕生したのが後に長野県歌となる「信濃の国」である。作曲は同学校の依田弁之助が担当したが、雅楽調であったためか愛唱されず、翌年病気の依田に替って赴任した北村季晴によって作曲し直された。この曲が長野師範学校女子寮の生徒に愛唱されて世に出たもので、やがて県民の間に普及し、県民の一体感に貢献するようになった。

このように最初から明確な目的を持って作られた歌詞なので、信州の地理、歴史、産業を歌い郷土の偉人4人を取りあげているが、北信の佐久間象山以外は全て南信の出身者または関係者で占められていて、ここには明らかに分県論に対する懐柔策があったと思われる。因みに分県論の出なかった東信からは一人も登場していない。

現在の視点からは仁科の代わりに真田幸村、太宰の代わりに恩田木工(松代藩家老、財政を立て直し、「日暮砦」を書く)、小林一茶(俳人)、赤松小三郎(上田藩士、英国海軍、議会政治の紹介者)等が入って来なければならない。

真田幸村に関しては、明治32年(1899)の時点では今日程全国的なヒーローではなかった事情もある。甲斐、甲府生まれで上野、岩櫃城で育った幸村は、多くの長野県民から見たらあくまでも他国者でしかなかったのである。勿論大阪では豊臣家の恩義を忘れず、大坂の陣に馳せ参じて散った義心厚い武将のイメージがあったが、江戸は徳川幕府のお膝元なのでアンチ徳川はご法度で、江戸時代には講談の一部にとりあげられた程度であった。

明治44年(1911)大阪の出版社立川文明堂が江戸時代から伝わる講談、戦記、史伝を集め、文庫本にまとめて出版し、ベスト・セラーとなった。最初は地元の豊臣秀吉の出世物語(「木下藤吉郎」「羽柴筑前守」と共に「智謀 真田幸村」)が出版されたが、好評だったので続いて「真田十勇士」更に「猿飛佐助」「霧隠才蔵」等の架空の忍者物語がヒットし、「大阪城冬之陣」「大阪城夏之陣」と出版され、真田幸村は全国的なヒーローとなった。

長野県歌「信濃の国」がもう少し後で作られるか、立川文庫が早く出版されたならば、作詞者は真田幸村を無視出来ず、歌詞に登場させたことであろう。

以上